

■第十六章 束縛 (bondage) の考察

この章は誤解を招きやすいかもしれない。仏教というものは、哲学として、論理によって説明できる現象界の問題理解と、それを越えた信仰である形而上の問題理解の二つがそろってはじめて成立するものである。そしてこの間に線引きをすることは大変重要なのであるが、往々にして、中観派の中においても、ここの部分の線引きの仕方が曖昧になることがあると思う。ナーガールジュナ自身がどう考えていたのかという解釈についても、恐らくいくつもの異なった意見があるに違いない。否定と反語によってのみ語るため、ときには虚無的な立場だと受け取られ、そうでなくてもこの章のように、論理的な問題理解だけを認めていて信仰の問題を否定しているかのように解釈されそうな部分もある。

具体的に言うと、この章では「輪廻 *samsara* への束縛」が検討されているのである。誰にでも明白なことだと思うが、「輪廻転生」や「涅槃 *nirvana*」という考え方は、それ自体の正当性を論理的に論証することは不可能であり、形而上の問題だと言っている。もちろん特殊な体験談を集めて論理的に検証し、経験的に生まれ変わりを説明することはできるかもしれないし、経験科学の手法を借りてそうしたことを説明する人もいるだろう。それはそれで意味のあることである。しかし、形而上の信念を排除した哲学としては成立しないし、万人が同じ経験として再現できるような仕方では証明できないことから、完全な経験科学としても成立しないはずである。結局のところ、輪廻が存在するという主張も存在しないという主張も、信念を含んでいるのである。ナーガールジュナは輪廻というものを、実体としては存在しないと言っている。同様に、涅槃も実体ではない。実体というものはどんな場合でも、言葉では立証できないからである。それでも仏教徒として、輪廻や涅槃というものを否定しているわけではないはずである。しかし字面のみを追いかけていると、特にこの章ではそのことを見逃してしまいやすい。輪廻など「ない」と言っているように聞こえかねないからである。輪廻や涅槃がはじめから形而上の理解を含んでいるならば、「それは形而上の信念の問題として重要である」とか、「瞑想体験でのみ確認できるが重要である」とか明確に表現して欲しいところであるが、決してそういう言い方はしない。あくまでも「ない」と言い、その「ない」の意味が「実体として」であるにしても、「実体として」という限定の言葉はしばしば省略している。迷妄に束縛された状態と、そこから解脱した状態というものは、何らかの意味で明確に異なっていなければならないはずであるが、論理的には常に同じ水準において「空」である、「依存的」で

あると言いつけており、違いを否定し続けている。これでは、「違っているが同じだ」と言っているように受け取られる可能性もあるだろう。

涅槃への執着も執着である、とはよく言われるフレーズである。この章でもナーガールジュナは、「涅槃を実体としてつかまえようとする者は、涅槃を得られない」と最後に締めくくるのであるが、これを「涅槃を形而上のものとして理解する者は、涅槃を得られない」と言い換えるならばおかしいことになってくる。涅槃という「概念自体」は確かに言葉で表されているが、内容としては、言葉による検証を超えた形而上のものを指しているのである。「実体」という言葉自体は実体ではなくても、それが表しているのは実体であるのと同じことである。救済のためには現世が苦しみの性質に満ちているものであるという理解が必要であり、執着が苦しみの原因であり、苦しみからの解脱は可能なのでそれを求めるべきであるとしていながら、「解脱にこだわる者は解脱できない」と表現する場合、いったい何が言いたいのであろうか。何にもこだわらないようにしている者は、何にもこだわらないということにこだわっていると表現できてしまう。こうした逆説表現についてのナーガールジュナ自身の立場を、この章の本文だけで間違えずに理解することは少々難しい。擁護することも、非難することも、恐らくどちらもできてしまうであろう。現代の哲学の立場から見ても破綻のない解釈をしようと思うならば、特定の詩の部分だけで意味を勝手にとらえたりしないように努力しなければならない。そしてそれこそが中論以降に中観派の中で歴史的に洗練されてきた見方であり、その中観派の中でも様々な意見の食い違いはある。

1. もし部分と原因で構築された事物（有為）が再帰循環 1 するならば
それらが不変のものとして循環することはない
もしそれらが無常のものならば、それらが循環することはない
同じことが意識を持つ存在 sentient beings（衆生）についても言える

1. 「再帰循環」としておいたが、これは「輪廻転生」のことである。2の詩以降ではもっぱら生き物のことを言っているので、それ以降は「転生」としておいた。1の詩でのみ、人間や生き物一般ではなく、「構築された事象」が主語になっているので、意味の上から「再帰循環」や「循環」としておいたのである。どちらも原語では同じであり、(Skt: samsar, Tib: 'khor,) 英語では transmigrate である。仏教の思想では、生き物が生ま

れ変わるというだけでなく、現象世界全体が繰り返されるととらえられる。宇宙全体も消滅しては誕生するということを、気の遠くなるような年月のサイクルで繰り返していると考えているのである。

1. 意識

もし部分に分割でき、原因などから構築された、概念で表されるような事物が消えては現れるというように循環するのであれば、それらが不変の実体として循環することはないだろう。（消えては現れるというように変化するのであるから、不変の実体ではないはずである。）反対に、構築された事物が常に変化し続ける無常のものであるならば、それが循環するということは考えられない。（循環するということは、この世で消えるものと次の世で現れるものとの間で変わらない何ものかが存続することだからである。）これと同じことは事物だけでなく、人間などの生き物についても言える。

わかりやすくするために「生まれ変わり」で説明してみる。この世から次の世へと生まれ変わる人間は実体ではない。生まれ変わるのだから変化しているわけであり、実体なら変化しないからである。しかし、人間が無常の存在なら、生まれ変わることはないはずである。この世から次の世へと生まれ変わると表現するからには、その二つの世で同一な何らかのものが存在していることになるからである。無常のものが同一のものとして存続することはない。

これは仏教の輪廻思想に潜む大きなパラドクスである。そもそも輪廻という説明自体が形而上のものであり、（一般的な）経験と論理では確かめられないものだからである。ナーガールジュナはこの詩で、あえてそのパラドクスを持ち出してみせているのである。

2. もし誰かが転生する場合に

その上でもし、集合体（蘊）の五つのあり方を持ち

個別的な境界と部分とを持ったものとして考えようとすれば

彼はそこには存在しないことになるわけだが、では何が転生するのだろうか

2. 意識

もし人間である誰かが転生するという場合、その人間を（、人間というものを精神・物理的に構成する五つの要素である）「集合体」という概念でとらえ、一人の人間として存在する個別の境界を持ち、部分を持ったものだと思えるなら、（そういう者はこの世を超えて次の世へ持ち越されたりしないはずであり、）彼は（実体としては）そこに存在しないはずである。それならば何が転生するというのだろうか。

3. 人間が（ある生を）つかまえること 2 から（別の生を）つかまえることへと 転生して行くな

その者は存在しないもの nonexistent だということになる

存在もせずつかまえもしないなら

誰がそのような転生者になり得るのだろうか

3. 意識

人間が一つの生から次の生へと肉体をつかみ、転生して行くと言うのならば（、その者は同一の者でありながら別の者へと変わって行く存在だと言っていることになるのである、矛盾している。したがって）、そのような者は存在しないものだという結論に至るだろう。主体として存在もしないのであれば肉体をつかみもしないということにでもなれば、いったいこのような転生者とはどういう者であり得るのだろうか。

変化し続ける本質を持った実体、という言い方は、そもそも矛盾しているのである。

三（四）行目で「存在もせずつかまえもしない」と言っているのは、「主体として存在しないならつかまえることもできない」という意味である。

2. grasping, Tib: nye-bar-len-pa. (取) 前の部分では「固執」と訳した語である。ここでは自分の身体をつかまえて生まれてくるという意味なので、「つかまえること」としておいた。執着して所有し、自分の一部だと思えるという意味である。

4. どうしたら部分と原因によって構築されたものが涅槃に入れるというのか
そんなことは言えないはずである
どうしたら意識ある者（衆生）が涅槃に入れるというのか
そんなことは言えないはずである

4. 意識

（この世から次の世へと同じ本質を持ち越すような実体だと言うならば、）どうしたらその構築されたものが涅槃に入れるというのだろうか。（本質を持った実体なら、束縛という本質も永遠に持ち続けているはずである。したがって）そんなことは言えないはずである。（本質を持続させるものとして）どうしたら人間が涅槃に入れると言えるだろうか。そんなことは言えないはずである。

5. 構築されたものはすべて、生じて滅するものである：
束縛されてもおらず、解放されてもいない
これと同じ理由で意識ある者（衆生）は
束縛されておらず、解放されてもいない

5. 意識

概念によって構築された事象はすべて、生じては消滅するものである。（したがって本質を持ったものという意味では再帰循環というシステムに）束縛もされておらず、解放されてもいない。これと同じ理由で、人間も、（本質を持ったものとしては）輪廻に束縛されておらず、解放されてもいない。

輪廻への束縛も解脱も、人間が持つ本質的な性質ではないということである。

6. もし（固執して）つかむこと（取）が束縛なら
つかんでいる者は束縛されていないことになるであろう
しかしつかんでいない者も束縛されてはいない
ではどんな場合に人は束縛されるのだろうか

6. 意識

もし自己と現世に固執し、対象としてそれをつかむことがそのまま輪廻への束縛と同じものであるなら、つかんでいる者は（次の生へとそれを手放さないかぎり、輪廻することはないはずであるから、転生をまたいだ輪廻というシステムに）束縛されてはいないことになるだろう。しかし執着してつかんではない者も束縛されていないわけである。そうになるとどんな状況にあるとき、人間は束縛されるというのだろうか。

この部分でガーフィールドは、固執すること（つかむこと）が束縛の原因でもあり、結果でもある、という説明をしている。³ 執着が輪廻へと束縛し、輪廻へと束縛されていることで執着が起きてくる。これは仏教の基本的な言い方であり、「原因でもあり結果でもある」と表現できるようなあり方こそが――錬金術の象徴にある尻尾を飲み込んだ蛇のように――実は我々の世界の根本的な成り立ちなのだという風に考えるのである。このような考えには我々は何か深いものを感じる。しかしこう表現するということは、因果関係という言葉の法則を用いて、それを超えた原理を示唆していることになる。因果関係という成り立ちではないような原理で世界を見ることができるなら、その方がいいかもしれない。たとえばユングが量子力学に共鳴して主張した「共時性」⁴ のような理解である。しかしこれはあくまでも因果関係では描けない世界であり、形而上学的な理解だということは心にとめておかなくてはならない。たとえ量子物理の実験結果によって経験的な因果関係の限界が確認され、観測者の結果への関与が認められたり――ペアになった電子スピンの時間を超えて連絡し合ったり、観測者が蓋を開けた瞬間に猫の生死が決定したり――しても、それこそ因果関係では描けない世界が露呈したということなのである。あとは形而上のリアリティ・モデルを否定するか模索しようとするかという問題になる。共時性のような現象が実験結果に現れたとき、人はそれを説明する科学の仮説モデルを創ろうとするだろうが、そのように因果関係の限界を超えたモデルであれば、その限界を超えた世界を

3. Garfield p.228

4. 原因と結果のような時間的な前後依存関係ではなく、関連し合った事項が同時に、因果関係的にではなく立ち現れることがあるという考えである。精神分析医であるユングは、患者の分析過程で内的な象徴としてコガネムシが現れたとき、実際に窓の外にコガネムシが飛来した体験をあげている。

因果関係でなんとか再度説明しようということなのである。説明する言葉というものは因果関係の法則に従っているからである。また、こうした仮説モデルは恣意的なもの（人間の見方にしがたって意図的に作られたもの）で、一つだとは限らない。単一の真実というものは存在しないか、あるいは今わからないだけでいつか見つかるか信じるかは個々の人間の見方の違いであり、量子力学とアインシュタインの立場の違いとして話題にもなった。科学と形而上学との境界線が揺れている、とでもいうべきだろうか。

7. もし束縛に先立って

束縛された者が存在するなら

束縛というものが想定されるにしても、それは存在していないのである

その他のことは、行ってしまったものや行かなかったもの、および行く主体

によってすでに説明されたはずである

7. 意識

もし「束縛」そのものが成立するときに、束縛された者が存在していなければならないのであれば、（他のものから独立してそれだけで存在している実体としての）「束縛」は存在していないことになる。（実体しか認めない論者にとっては、束縛がまったく存在しないものだということになるだろう。）この論理とそれに付随する残りのことすべては、（第二章や第八章の）行く者と行くことのところで説明した通りである。

輪廻への束縛は本質的な実在ではない。束縛される主体としての人間の存在なくして、束縛という概念は成立しないからである。このことは運動と運動主体に関する議論ですでにふれてきたことである。

8. 誰であれ束縛されている者は解放されていない

誰であれ束縛されていない者は解放されることがない

もし束縛された者が解放されているなら

束縛と解放は同時に生じるはずである

8. 意識

（本質的に）輪廻に束縛されている者は輪廻から解放されてはいない。（そして本質は永続する属性なので変化せず、したがって輪廻から解放されることもない。）かといって、

（本質的に）輪廻に束縛されていない者が輪廻から解放されるということもない。（束縛されていないなら、あらためて解放される必要などないからである。）もし輪廻に束縛されている者が解放されてもいるというなら、束縛と解放が同時に生じることになる。

ここでは第二章の運動の議論が当てはめられている。物体が動いていながら静止しているということがあり得ないように、輪廻に束縛されていながら解放されているということもあり得ない。束縛されながら同時に解放されている実体などないのである。本質論、実体論をとれば、束縛と解放とは別々の実体であり、誰かが束縛から変化して解放へと至るといふ筋道はあり得ないということである。

9. 「私は、（つかみ）固執すること grasping をやめることで悲しみの及ばぬところに至るだろう、そして私は涅槃へと到達するだろう」と、ある者は言う

このように理解する grasps 者は誰であれ

並はずれて固執している Has a great grasping.

9. 意識

「『私』5 は実体性を確信したりそれに固執したりすることをやめることで、苦しみの及ばない世界へ至り、涅槃に到達するだろう」と言う者がいる。しかしこのように（「私」というものを主体として）理解する者は、（固執と輪廻への束縛状態から解放された涅槃まで変わらずに続く主体である「私」というものを想定するという意味で）大いに実体性を確信し、固執しているのである。

5. ここでは「私」という語が強調されている。ガーフィールドは、「チベット語訳でのこの詩には文体上の特徴があり、『私』 bdag という代名詞が特定の人物を意味しない仕方

方で文中に置かれており、焦点を合わせる不変化詞 focus particle (ni) によって強調されている。」と述べ、主体の実体性というものを想定した言い方になっていることに注意を喚起している。英訳では I の後に , を置いている。Garfield p.229

この詩の主張を理解するときには注意が必要である。ナーガールジュナや中観派は、涅槃を求める気持ちを持つことを否定はしていない。それはこの中論の他の部分にも出てきているし、悟りを求めることを否定し、四つの聖なる真実――悟りを求めることができる――と説いている――を否定したのでは、仏教の救済は成り立たないのである。大乘仏教においては、他者を益することができるように知識と技術と慈悲心を培い、すべての衆生のために悟り（涅槃）に達するという利他の大望を養うことが大切だと説いている。涅槃を求めることは絶対に必要なのである。そのことと、この詩で否定されている「涅槃をつかみ固執すること」とを混同しないようにしなければならない。中観に味方しない者はこうした表現を言い逃れだと言うだろうが、ここで「つかむ」と言っているのは、本質を持ったものとして概念的に実体視する、という意味である。涅槃の状態というものは概念的意識の状態ではないのであり、つかむことの完全な停止が必要になると言う。つかむことが涅槃を妨げるのである。したがって通常の意識の状態で涅槃に至ろうと願って修行を始めることは必要だが、涅槃に至る瞬間には涅槃をつかむことさえ完全に放棄されていなくてはならない。切望の気持ちも止んでいる。

かといって、涅槃も含めたすべてが相互依存によって成り立つ非実体的なものである、と概念的意識で理解したところで、そのことだけによって涅槃に至れるものではないことも間違いない。

10. あなたがたが涅槃をなし遂げられず
輪廻する存在のあり方を浄化することもできないならば
輪廻する存在とはいったい何なのか
そしてあなたがたが吟味している涅槃とは何なのか

10. 意訳

（実体として自己や涅槃をとらえる）あなたがたが涅槃をなし遂げられず、輪廻に束縛された状態を浄化することもできないということになれば、（あなたがた実体論者にとっての）輪廻する存在とはいったいどういう意味を持つものかというのだろうか。そして（実体論者の）あなたがたが問題にするような涅槃とはいったいどういうものなのだろうか。

ナーガールジュナはここで誇張した、挑戦的な言い方で締めくくっている。自己を実体

視しても、涅槃を实体視しても、涅槃――悟りの静寂――に至ることはできない。したがって、自分が実体的に物事を見ていないか、よく吟味してみる必要があると言っているのである。サンサーラ（輪廻）もニルヴァーナ（涅槃）も、それが实体であるなら脱出不能であり、到達不能である。「あなた（がた）」と言っているのは、実体論者のことである。